

外国語の学習、洋の東西

松 岡 晋

はじめに

ひとびとはどのようにして外国語と取り組んできたのだろうか、というのが、当面、私の最大の関心事である。それを知りたくて、様々な方々の外国語学習体験記、国外滞在記等に目を通してみた。十数冊も読んだであろうか。それらのほとんどは語学教師以外のひとびとの筆になるものであり、いずれも、日本人として欧米の言語を学ぶ際の苦勞、苦惱、それにある種の挫折感が率直に記されている点で、感動的であった。それに較べて、天に唾するようであるが、語学教師の記した書物には、「当初は『聞く・話す』で苦勞したが、創意・工夫でそれらを克服した」といった類いの叙述が多く、安手のサクセス・ストーリーでも読まされた気分させるものが少なくない。いずれの側に真実があるのかは判断しようもないが、我々の母語（＝日本語）とヨーロッパ近代諸語との大きな隔たりを考えてみれば、いくら努力を重ねても究極のところ壁にぶつかったと述べるひとたちの「誠実さ」に私は与したい。では、ある外国語を完全にマスターするとはどういうことなのであろうか、どの程度まで到達すればそう言えるのであろうか。こんな問いを抱いて、私は次に「語学の天才」ないし語学にきわめて優れたひとびとの足跡を辿ってみることにした。それが小論である。当初、私は日欧の「語学の達人」と言われる人物たちの比較論を考え、日本人としては明治初期の新渡戸稲造、岡倉天心を念頭においていた。しかしながら、彼らの英語修行に関しては具体的な学習方法を示す資料もなければ、本人の回想等もまったく記録されていないのである。（齊藤兆史『英語達人列伝』、中公新書、2000年、p.82） 従って、彼らについて記すことは断念し、多分に恣意

的に選んだ三人のヨーロッパ人について述べることにした。この三人をとおして日本人の外国語学習の姿が逆照射されれば、と願っている。

以下で話題にする三名とは、ハインリヒ・シュリーマン、カール・シュルツおよびピーター・フランクルである。シュリーマンを取り上げるのは、巷間「語学の天才 Sprachgenie」と称されていることへの敬意からである。シュルツは、かつて私が1848年革命後のドイツ人亡命者について調べた際に遭遇した人物であり、その意味で私の「趣味」を反映している。ピーター・フランクルは、周知のように、各国を放浪したのち、十数年前から日本に定住する数学者であり、彼にはいわば東西の架け橋としての役割が期待される。

I ハインリヒ・シュリーマン、ある実利主義者の独習

まずは、トロイの発掘者にして、語学の天才と言われるハインリヒ・シュリーマン Heinrich Schliemann (1822-1890) についてである。ここでの話題と直接のつながりはないが、昨今その『自伝』¹に基く神話的シュリーマン像は崩壊しつつある。とりわけ、シュリーマンがトロイを発掘するという夢を幼い頃から抱き続け、そのための資金を得るべく半生を商売に傾け、後半生において初めてその夢を実現したというくだりは、遺された彼の日記、手紙等の資料と突き合わせてみれば、まったくの虚偽であることが判明するという。彼の『自伝』は、「自らの人生の『書き直し作業』の一部である」というのが、近年のシュリーマン研究の結論である。だが、『自伝』中の外国語学習に関わる部分の叙述については、とりたてて疑問も提示されておらず、おおむね真実が語られているようである。以下で『自伝』の当該箇所とディヴィッド・トレイルの批判的研究²に依拠しつつ、シュリーマンの語学学習をみることにする。

シュリーマンは1822年、プロテスタントの牧師エルンストを父として、ドイツの北辺の地メクレンブルク＝シュヴェリーンに生まれる。父エルンストは、「自分勝手に、酒飲みで、女性にだらしなく、およそ牧師という職業にはふさわしくない」性格で(トレイル『シュリーマン』、p.34)、ついにはその職を辞する羽

目になる。そのためにハインリヒは1833年、入学したばかりのノイシュトレーリッツのギムナージウムをわずか三ヶ月で退学し、同市の実科学学校へ転じる。同校で履修した三つの外国語の成績が残されているが、大学への道を絶たれて勉学意欲を失ったせいであろうか、その成績は平均以下であり（フランス語「良」、ラテン語「不可」、英語「良」）、のちのシュリーマンの姿は片鱗もみられない。1836年4月に実科学学校を卒業した彼は、フルステンベルクの小さな雑貨屋に見習い奉公に入る。ここでハインリヒは雑貨商の仕事の徹底した訓練を受け、「『どんなに辛くても仕事を怠けない』という、この時点からの彼を特徴づけることになり、およそ父親からは学ぶべくもなかった素質を身につけた」（トレイル、『シュリーマン』、p.39）といわれる。見習い期間は五年間続くが、1841年の復活祭のある日、重労働がたたって咯血し、この商店を去る。それからハムブルクへ出て、事務職に就くが、簿記もわからなければ外国語も話せなかった彼はどこでも長続きせず、同年12月、ほとんど着の身着のままアムステルダムに辿り着く。『自伝』には記されていないが、アムステルダムに着いてしばらく経っても、彼はオランダ語をほとんど喋れなかったらしい。彼の故郷の言葉がドイツ語のうちでもオランダ語、英語に最も近い低地ドイツ語 Plattdeutsch/ Niederdeutsch であることを考えれば、これは驚くべき事実である。したがって、やっと彼が見つけた仕事は、とある商会の小間使いでしかなかった。ここに至ってようやく、シュリーマンは外国語を身につける必要性を感じ取る。彼の語学学習は、「大きな貿易商会で事務職を得る」ことを目的に始まったのである。まず筆跡矯正に取り組んだのち、本格的な語学学習を始める。シュリーマンの外国語勉強法として有名な、『自伝』中の次の個所をここで引用しておこう。

「もっとよい地位につくために、ひきつづいて近代語の勉強に熱心にとりかかった。私の給料は年額わずか八百フランだったが、私はその半分を勉強のためについやした。...しかし、ほかならないこの貧困こそが、そして、一生懸命に勉強すればこの貧困から抜け出せるという確実な見

通しこそが、なににもまして私をはげまして勉強させたのである。...そんなわけで私はわき目もふらずに英語の勉強に熱中した。私はこのとき必要にせまられて、外国語習得法を一つ見つけたが、この方法を用いると、どんな外国語でもひじょうにらくに覚えられる。このかんたんな方法というのは、なによりもまずこうである。声をだして多読すること、短文を訳すこと、一日に一時間は勉強すること、興味あることについていつも作文を書くこと、その作文を先生の指導を受けて訂正し暗記すること、まえの日に直されたものを覚えて、次の授業に暗誦すること。子供のときからすこしも記憶力を訓練していなかったもので、私はものおぼえがわるかった。しかし私はわずかな時間もけっしてむだにしなかった。時間を盗んでまでも勉強した。できるだけ早く正しい発音を身につけようと、私は日曜日にはきまって二度ずつ英国教会の礼拝にかよい、熱心に説教をきいてはそのひとことひとことを小声でくりかえした。使いに出るときには、たとえ雨が降っていようとも、かならず本を手にもって、その本から何かを暗記していた。郵便局で待たされているときにも、かならず本を読んでいた。私はこうして記憶力をしだいに強くしていった。そして早くも三ヶ月後には、あらかじめ注意深く三回通読しておく、毎日の授業のたびに先生のテイラーさんとトンプソンさんのまえで、二十ページにわたって印刷された英語の散文を一字一句まちがえずにらくらく暗誦できるようになった。この方法で私はゴールドスミスの『ウェイクフィールドの牧師』とウォルター・スコットの『アイヴァンホー』をそっくり暗記した。...こうして私は半年で英語に精通した。」(シュリーマン『自伝』、p.24-26)

続いて、同じ方法でフランス語を学んで、「次の六ヶ月でフランス語に熟達し」、「このたえまない猛勉強のおかげで、一年のあいだにたいへん物覚えがよくなって、オランダ語、スペイン語、イタリア語、ポルトガル語の習得はまったく容易になり、それぞれの言葉を流暢に話したり書いたりできるようになる

のに六週間もあればじゅうぶんだった」ことが記される。(シュリーマン『自伝』、p. 26) このような猛勉強の結果、シュリーマンは、1844年3月1日付けで、当時のヨーロッパでも指折りの貿易会社であるシュレーダー商会に書記および帳簿係として採用された。(トレイル『シュリーマン』、p.44) 入社後、彼はこの会社がロシアとの間でかなりの取引があるのに誰一人としてロシア語を解さないことにすぐ気付いて、この言語の勉強をまったく独力で始め、やはり半年後に完全にマスターする。(シュリーマン『自伝』、p. 27-28) そして1846年1月、シュレーダー商会の代理人としてサンクト・ペテルスブルクに派遣され、のちにはその地で商人として独立し、クリミア戦争やアメリカ南北戦争にも乗じて巨万の富を築くのである。

シュリーマンの述べるところでまず最初に目につくのは、外国語の勉強を始めるにあたっての明確な動機、目的の存在である。彼にとって英語、オランダ語等の習得は職業上不可欠であり、ロシア語の学習は社会的上昇への第一歩だったのである。次に注目されるのは、彼の外国語学習順序にみられる確かな系統性である。つまりシュリーマンは、基本的に独習者でありながら、自分が学ぶ外国語の順番を決めるにあたって、おそらく無意識にはあろうが、きわめて合理的な判断を示し、まず最初に母語のドイツ語に最も近い西ゲルマン語系の英語を学習し、続いてフランス語、スペイン語、イタリア語等のロマン諸語に取り組み、そのあとでスラヴ語系のロシア語を学ぶのである。彼が幾多の外国語の習得に成功した理由はこのへんにもあるように思われる。上の引用文中では、そのほかに、学習の初期段階における短期集中、日々の規則的学習、作文・翻訳を通じての語彙や構文の習得、音読、リピーティング(=英国教会の礼拝訪問)による発音練習などについても語られている。それら自体は、現在もなお外国語学習の大事な要素とされており、いわば普遍的妥当性を有している。だがよくみれば、シュリーマンの場合、作文・翻訳が文法学習の代わりをつとめ、基本的音素の習得という段階を経ずに音読、リピーティングに取り組むのである。このことは、後出の二人の場合にも言えるのだが、母語と習得目標の外国語との近さを示しているのである。日本語を母語とする者が近代ヨー

ロッパ語（＝屈折語）を学ぶに際しては、基本的な文法知識と日本語には無い音素の学習が不可欠であろう。

『自伝』に描かれるシュリーマンの猛勉強ぶりについて、トレイルは、「ここまですれば、どんな言語でもマスターできるにちがいない」（トレイル『シュリーマン』、p.44-45）と述べている。これは、多くの日本人にとって、ショッキングな発言であろう。我々は、少なくともスピーキングとリスニングに関しては、「ここまでやっても」母語並みのレベルに到達することはほぼないのではなかろうか。

II カール・シュルツ、ある理想主義者のフランス語と英語

シュリーマンとほぼ同時代人にカール・シュルツ Carl Schurz (1829-1906) という人物がいる。シュルツはケルン近郊のリプラール村に生まれ、村の小学校を終えたのちケルンのカトリック系ギムナージウムに学び、1847年秋ボン大学へ入学する。彼の夢はいずれ歴史学の教授になることであったが、早くも入学の翌年革命運動に巻き込まれる。革命の敗北後は、1849年から1852年までスイス、フランス、イギリスで亡命生活を送ったのちアメリカへ渡り、その地で奴隷制反対論者として南北戦争に参戦したほか、アメリカの政治に深く関わり、駐スペイン大使、連邦上院議員、内務大臣などを務める。したがって、シュルツは一般にはドイツ系アメリカ人政治家としてのイメージが強いのであるが、バーデン蜂起参加を理由に終身刑に処せられたボン大学時代の恩師ゴットフリート・キンケル Johann Gottfried Kinkel (1815-1882) を1850年11月シュパンダウ刑務所から救出したことで、1848年革命史にもその名をとどめている。³

シュルツは自らの生い立ち、ケルンのギムナージウム時代、ボン大学時代、1848～49年革命期の諸事件、亡命生活、さらにはアメリカでの政治活動などを克明に記した三巻からなる『自叙伝』⁴を遺している。まるで教養小説のような魅力あふれるこの『自叙伝』のなかで、彼は自らの外国語学習についても詳しく述べる。まずギムナージウムでの勉学に関しては、なによりも、ヨーロッ

パ的教養の基礎をなすラテン語、ギリシャ語、古典文学の勉強に多大な時間が費やされたことが記されている。ただしこれについては、すでに当時から、もっと近代語に重点を置くべきではないかとの意見もあったようであり、シュルツ自身も自問自答を繰り返す。19世紀ドイツの教養・実用論争は、古典語か近代語かが争点なのであった。

「生徒達の時間と学習力のこんなにも大きな部分をラテン語、ギリシャ語および古典文学の勉強に用いることが賢明であろうか。ラテン語やギリシャ語を、その知識が実生活ではるかに役に立つ近代の諸言語や文学に置き換えたほうが若い世代にはもっと有益なのではないだろうか。このような疑問の正当性はたしかに否定しえない。ラテン語はいわゆる文明世界の大半の国々において18世紀の初めまで、いやいくつかの国々においてはもっと後の時点までそうであったところのもの、つまり外交、法律、哲学、学問全体の言葉ではもはやないのである。...私はもちろん、そして残念ながら、生徒のときには覚えていたラテン語やギリシャ語の多くを、波瀾に富んだ人生を送るなかで忘れてしまった。...だがそれらの学習は単なる知識の獲得ではなく、言葉の最良の意味で教養の構成要素 *Kulturelement* なのである。古典の勉強をするのか、それともいわゆる『役に立つ』勉強をするのかどちらかを選べともう一度言われたならば、私は疑いなく、大体において自分が受けたのと同じカリキュラムを選ぶであろう。私は古典語の学習をギムナージウム時代に始めていなかったならば、恐らく後の人生において決して始めることが出来なかったであろうし、古典語の知識は後に近代語の習得に際しても計り知れないほど役に立っただけに、私は一層ためらいなくそうするであろう。ラテン語を理解する者は、フランス語、英語、スペイン語、イタリア語、ポルトガル語をはるかに容易に学ぶだけでなく、はるかに良く学ぶであろう。私自身に関して言えることは、私は実際にはラテン語の文法だけを完全に理解したが、この知識が近代のロマン諸語およびゲルマ

ン諸語の文法を学ぶ際にあらゆる苦勞を取り除いてくれたのである。」

(Schurz, Lebenserinnerungen, Bd. I, S.90-93)

もちろんこれはずっとのちの回想であり、当時のギムナジウムでの近代語の学習は、古典語のそれと比較して確かに不十分なものであったようである。シュルツは正課としてフランス語を学び、歴史の教師から個人的にイタリア語の初歩を学んだが(Schurz, Lebenserinnerungen, Bd. I, S.69)、それらをものにしたとはとても言い難い。彼は1850年3月半ば、最初の亡命地チューリヒを出発してドイツ国内に潜入し、ボンでキンケル夫人ヨハンナと会ってキンケル脱獄計画について打ち合わせたのち、ケルン、アーヘン、ブリュッセルを経てパリに向い、その地に約一ヶ月間滞在するが、そのときの体験として、「私はすでにブリュッセルで、自分がギムナジウムで受けたフランス語教育では朝食も注文することができない、ということに気づいていた」と述べている。それで彼は、パリ滞在中、辞書を片手に新聞をじっくり読み、覚えた言葉や言いまわしを実際の会話で使ってみて、その結果、「数日後にはもう、日常生活の事柄ならある程度自分でやっていける」ようになったという。(Schurz, Lebenserinnerungen, Bd. I, S.268-269) シュルツがフランス語と真剣に取り組むのは、1850年12月から1851年6月にかけての二度目のパリ滞在中である。この頃の彼は、他の亡命者達と同様に、いまなお革命の再来に期待をかけ、政治活動と革命史の勉強に専念していた。そのために、どうしても自分のフランス語を完璧なものにしたかったのである。「私は自分のフランス語を完全なものにし、フランス語をその特徴的な魅力をなす優雅さで話し、書くことを学ぶ必要を感じた。私の友人の一人はマダム・ラ・プランセス・ドゥ・ボフォール Mme la Princesse de Beaufortという華麗な名前の女性教師を私に薦めた。」(Schurz, Lebenserinnerungen, Bd. I, S.358) 彼女は革命で没落した高位貴族の出身で、現在は語学教師として生計を立てているという触れ込みである。あるホテルガルニの質素な住居を訪ねると、感じの良い、上品な顔立ちの、やや年をとった女性が待っていた。授業は週二回、授業の方法はシュルツが自分で決めてよいということなので、彼は、通常のやり方で文法規則を終わりまでやり通すのではなく、自分の興味のある

テーマないし彼女が提示するテーマについて短い手紙または作文を書くことを提案する。そして先生がその中の誤りを訂正し、そのフランス語的でない言いまわしに代わる慣用的表現を教える、というのである。その際、一冊の文法書を手許に置き、もし文法的ミスをした場合にはそれで調べることにする。この提案は彼女の気に入り、またシュルツはすでにある程度はフランス語で意思を伝えることが出来たので、さっそくこの方式で授業に取りかかった。(Schurz, Lebenserinnerungen, Bd. I, S358-359)

「この方法は素晴らしいものであることが立証された。私の手紙ないし作文は、私がたったいま出会った事件や、私が見た博物館や絵画コレクション、読んだ書物、あるいは日々の出来事、さらには私の関心を引いた政治的諸問題を題材とした。私はいまや、ギムナージウムの生徒達が普通ラテン語の作文を書くように単に語形を文法的に並べるのではなく、私の観察、経験および意見をまったく自由に述べ、それによって私の作文練習に出来る限り興味深い内容を付与しようとしたので、先生は私の言葉上のミスを訂正するだけでは満足せず、我々の間に活発な会話が始まり、そのさい彼女は私の作文のテーマをさらに詳論するよう私を促すのであった。この会話のなかで彼女は、徹底したした言語の知識とともに鋭敏な才知を示したので、会話は我々二人にとってとても楽しいものとなり、定められた時間の経過を忘れることもまれではなく、私がお暇しようとして立ち上がると、彼女は、議論されているテーマをもう少し続けるために、私にとどまるよう求めるのであった。私はいまやその他にもたくさん読書し、その際、自分がわからない言葉や言いまわしを無視して通り過ぎることは決してしなかったので、私の進歩はとても大きなものとなり、数週間後には先生が私の作文を、そこには訂正すべき箇所がなにも見つからない、と確言して返してくれることもまれではなかった。」(Schurz, Lebenserinnerungen, Bd. I, S359-360)

シュルツがここで目標として掲げ、また実際にほぼ到達したフランス語のレベルは、アメリカ人のマニュアルに当てはめると、外国語学習の最高段階である「教育を受けたネイティブ・スピーカーのレベル」(J.ルービン、A.トンブスン著 [西嶋久雄訳]『外国語の効果的な学び方』、大修館書店、1998年、p.38)、つまりフランス語を母語とする知識人の水準なのである。実現はしなかったものの、彼はおそらく、フランス語での書物執筆ないしジャーナリストとしての活動を考えていたに違いない。シュルツの学習方法はきわめて正統的であり、もちろん実用的運用能力をすでに備えたうえで、なお完璧な語学知識を求め、なによりも文章表現訓練を推奨する。

「こんなふうに外国語を習得するのは、効果的であると同時に楽しいものであることが確かめられた。自分の考えを自由に表現し、そうすることで言葉を自分で操ろうという試みは、ごくわずかな語彙でも始めることができるのである。次いで、誠実な読書と分別をもっておこなわれる会話が語彙を急速に増やし、容易に表現する力を育てるであろう。だが私は、自分の考えを文字で表現することが外国語を習得する最も効果的で、最も重要な練習であるという点をいくら強調しても、強調し足りない。単なる会話においては、我々は困難な点を、あいまいな、あるいは不正確な言い回しで急いで通り過ぎてしまいがちである。そのような言いまわしは、文字での表現の場合には訂正を要するのであり、しかもそうした訂正は、書かれた言葉が我々の目に入るわけであるから、しっかりと記憶にとどまるのである。もちろんそのためには、生徒に文法規則を教え込むだけではなく、語学の勉強においてもその他の精神的刺激を引き起こすことのできる教師が必要である。この要求をプランセス・ドウ・ボフォールは大きく満たしてくれたのであり、私が彼女のもとで過ごした時間は、私にとっていつまでも特別に楽しい思い出であり続けている。」(Schurz, Lebenserinnerungen, Bd. I, S.360)

上の引用箇所は、母語を少し加工すれば日常場面でのフランス語などなんとかになってしまうドイツ人の述べた言葉であるからこそ、重みがあるのである。そしてまた、こういう発言を耳にすれば、我々は大いなる共鳴を感じ、今後の学習への望みが繋がるような気になるのである。

次にシュルツと英語の関わりをみてみよう。シュルツは1850年8月からベルリンに潜伏し、二ヶ月に及ぶ入念な準備の末、11月7日未明、シュパンダウ刑務所からキンケルを救出する。二人は同志達に支えられてロストックまで逃亡し、トラヴェミュンデから小型帆船でイギリスへ向い、同月末スコットランドの首都エジンバラ近郊の港町リースに上陸する。彼らはすぐ船を下りてエジンバラ見物に出かけ、午後遅くなってリースに戻り、とあるホテルで昼食と一夜の宿を請う。だがまったく言葉が通じない。ドイツ語やフランス語で話しても相手は理解しないし、英語を喋ろうにも、二人の知っている単語は“beefsteak”と“sherry”の二つだけだったという。(Schurz, Lebenserinnerungen, Bd. I, S342-346) キンケルとシュルツは、つい一年半ほど前まで、ボン大学の教授と学生だったというのに。ライン地方の「第一外国語」はフランス語だったのである。その後キンケルは妻子とともにロンドンに住み、シュルツも、フランスを追放されたのち、1851年6月半ばロンドンにやって来る。シュルツの感じた英語の第一印象は、きわめて悪いものであった。

「かの日々に私はまた英語の最初の印象を感じた。しかも、この言語をよく知ったいまでもなお、ほとんど説明がつかないような印象をである。有名な悲劇俳優のマクリーディが一連のシェークスピア劇の役柄を演じていた。我々は彼が『マクベス』と『ヘンリー八世』に出ているのを観た。私は、話される言葉はわからなかったが、これらの作品を十分知っていたので、会話をフォローすることが出来た。だが楽しむことは出来なかった。というのは、澄んでいない母音と歯擦音が、いやそれどころか英語の音の響きと抑揚全体がとても非音楽的で不快に耳に入ってきたからであり、私は、こんな言葉は決して学ばない、と考えたもので

ある。そして実際、この不快な第一印象は、私がその後ロンドンに住んだときも、英語の勉強と真剣に取り組むのを長いあいだ妨げたのであった。」 「私は英語で話すことが出来たならば、個人教授活動をはるかにもっと広げることが出来たであろう。だが、のちには自分自身でも奇妙に思ったのだが、私の音楽的耳は当時、英語の響きに対する嫌悪をまだ克服することが出来なかった。英語独特の音楽を正しく評価できるようになったのは、私がこの言葉自体を理解してからであった。私が入りしていた人々のあいだでは、ドイツ語とフランス語で事足りた。」
(Schurz, Lebenserinnerungen, Bd. I, S347 und S.378)

シュルツの人生はやがて大きな転換点を迎える。亡命者間の絶えざる諍い、革命資金調達計画「ドイツ革命公債」の大失敗、1851年12月2日のレイ・ナポレオンのクーデターによって近い将来のヨーロッパ革命再来の可能性がなくなったことなどの理由から、彼はアメリカへの移住を決意するのである。1852年8月、シュルツは新妻マルガレーテを伴ってポーツマスを出航し、二十八日間の船旅ののち、9月17日永住の決意とともにニューヨーク港に到着する。シュルツ二十三歳、マルガレーテ十八歳であった。(Schurz, Lebenserinnerungen, Bd.II, S.1-2) 二人は、数週間をニューヨークのホテルで過ごしたのち、友人達がすでに移住していたフィラデルフィアへ赴く。そこでしばらく腰を落ち着け、今後に備えるためであった。シュルツは、ここで初めて英語の完全なる習得を決意する。英語学習について、彼自身が語るところをみてゆこう。

「さて私の第一の課題は、出来る限り短期間に英語を学ぶことであった。...私は英語の文法書は用いなかったし、これまでその種のを自分の蔵書に持った覚えがない。私は固い決意で、まず最初は英語の新聞を読み始めた。それはたまたま『フィラデルフィア・レジャー』であった。私は規則的に、毎日、時間が許す限り、論説、通信記事や電送記事、それに広告までくまなく読んだ。『フィラデルフィア・レジャー』

紙は...当時は小型版の印刷の良くない新聞で、政治的にはかなり無色であり、読者を主として「春の喜び」、「友情の美しさ」、「有徳なる人生の祝福」といった類いの他愛のないテーマに関する論文で楽しませ、ときとしてももちろん少し味気ないものであったが、文体の点ではまったく立派であった。それから私は小説を読み始めた。私が最初に読んだのは『ウェイクフィールドの牧師』であり、それにウォルター・スコット、ディッケンズ、サッカレーが続き、次いでマコーレーの歴史エッセイを読んだ。それから、私は法律家になる準備をしようと考えていたので、『ブラックストン注釈書』を読んだが、その明晰で、簡潔かつ力強い文体を私は今なおすぐれた手本だと思っている。シェークスピアの戯曲は、その途方もない語彙のために他のどれよりも難しかったので、一番あとにした。しかし私はきわめて誠実に読書した。自分がはっきりわからない単語を読み飛ばすことは決してなかったし、不確かな場合に辞書で調べるのを怠ったことは一度もなかった。」(Schurz, Lebenserinnerungen, Bd.II, S.8-9)

英語を真剣に学ぶのは初めてとはいえ、一年以上のイギリス生活、母語のドイツ語と英語の近親性などの理由から、シュルツはすでに十分、英語に慣れ親しんでいたはずである。であるからこそ、彼は文法を省いて、新聞、書物を読むことから始めることが出来たのである。読書に際しての彼の誠実さ、厳密さは、フランス語の学習の場合と変わらない。シュリーマンと同様に、ゴールドスミスの『ウェイクフィールドの牧師』やウォルター・スコットの歴史小説を読んだのは、時代のなせるわざであろうか。シュルツは、つづいて、読書と並ぶもう一つの勉強方法に言及する。それは最も効果的な外国語の作文練習として、わが国でも古くから推奨されてきたものであるが、実行に移されたという話しはほとんど聞いたことがない。

「同時に、私はある練習にいそしんだが、それは非常に目的にかなう

ものであることがわかった。私は『ジュニアスの手紙』⁵をドイツ語訳で知っており、この種の政治的議論の見事さにとても強く魅せられていた。英語の知識が十分に進歩したと思うとすぐに、私はジュニアスの英語版を手に入れ、かなりの数の手紙を英語からドイツ語に文字で書いて翻訳した。それから私は、自分のドイツ語訳をまた再び文字で書いて英語に訳し戻し、この重訳を英語の原文と比較した。これは確かに骨の折れる作業であったが、私はそれがいかに有効であるかを、いわば腹の底から感じた。読書とともに、この練習は、言語のロジックと言語のミュージックに対する感覚とでも名付けたいものを私に授けてくれた。私は手紙やその他のもっと重要なものを英語で書き始めたとき、書かれたものを読んでみて、自分が用いたある種の表現が文法的に正しいのかどうか疑問に思って、立ち止まることがまれではなかった。そんな場合に、私はときとしてそれらの表現を別の言い回しで置き換えようとしたが、権威ある人に確認してみると、ほとんど例外なく、私が最初に自分の本能に従って選んだフレーズのほうが、あとで置き換えたものより良いことがわかった。このような勉強を始めて六ヶ月も経たぬうちに、私は、あまり多くの専門用語の知識を必要としない会話ならかなり容易に英語でおこなうことができ、また、きちんとした手紙を書くのに十分なまでの進歩を成し遂げたのである。」(Schurz, Lebenserinnerungen, Bd.II, S.9-10)

シュルツの語学学習について私の側から言うことは、もうあまりない。あえて一言繰り返すならば、彼の知的誠実さということであろうか。それは革命家、理想主義者としての彼の人生そのものであった。

III ピーター・フランクル、東西の架け橋として

次に取りあげるのは、1988年から日本に在住するピーター・フランクル(ハンガリー名フランクル・ペーターFrankl Péter) というユダヤ系ハンガリー

人の場合である。彼は自らの生い立ちと1982年の初来日に至るまでの経歴を、その自伝的著書『数学放浪記』（晶文社、1992年）に記している。彼は共産党支配化のハンガリー人民共和国成立から四年経った1953年3月26日、同国南部のカポシュバルに生まれる。両親は医師であり、比較的裕福な家庭であったが、二人ともナチの強制収容所の生き残りであり、一家は戦後なお東欧特有の反ユダヤ主義に苦しめられる。小学生の頃から数学の才能に恵まれたピーターが、のちに様々な外国語を習得して国外へ飛び出すのは、スターリン主義と反ユダヤ主義からの脱出でもあった。彼が初めて西欧へ向うのは1975年のことであり、フランス政府奨学生として七ヶ月間パリに滞在する。その後、1979年にフランスへ亡命し（1987年フランス国籍取得）、以降、数学者として三十以上の国々を旅し、日本語、中国語を含む十二カ国語を話すという。彼は上記以外にも何冊か日本語で著書を出版しているが、そのなかに『ピーター流らくらく学習術』、『ピーター流外国語習得術』（いずれも「岩波ジュニア新書」、1997年および1999年）の二冊がある。それらは青少年向けの書物ではあるが、なかなかレベルが高く、自らの外国語習得体験以外にも、日本社会への提言や、宮沢喜一氏は英語が出来ても国際人ではないとか、日本人はあまり同僚と飲み歩いたりせず、その時間を外国語の勉強にあてよ、といったなかなか為になることが書かれている。

ピーターが最初に取り組んだ外国語は、ヨーロッパ人の通例どおり、近隣のヨーロッパ諸語であった。彼自身の述べるところによると、十代後半から二十代前半までにドイツ語、ロシア語、スウェーデン語、フランス語、英語、スペイン語、ポーランド語を学んだという。それらのうち「必然的に勉強したのはドイツ語と英語の二つ」であり、「ロシア語も半分必然的」であったが、のちに大きな意味をもつフランス語を学んだのはまったくの偶然であった。（『ピーター流外国語習得術』、p29およびp.54-55）ドイツ語の学習は、ハンガリー人にとって、隣国オーストリアとの歴史的繋がり、大国ドイツとの経済的関係からして必須であり、英語は「数学の文献を読むため、また自分で論文を英語で執筆するため」に不可欠であった。それに対してロシア語の学習は、半ば政治

的強制である。「まだ十代半ばでドイツ語を習得して、自分にあった方法を見つけたことは、ぼくにとって大きかった」（『ピーター流外国語習得術』、p53）と自ら語っているのであるから、まず彼のドイツ語学習過程をみてゆこう。ピーターは小学校入学時から家庭教師のもとでドイツ語の勉強を開始し、それは断続的に続き、高等学校では正課として学ぶ。しかし、なかなかうまく進まない。この段階では、彼の言葉を借りると、自分なりの学習方法が確立していなかった、ということになるろう。転機は高校一年の夏に訪れる。彼は毎年二ヶ月間の夏休みをバラトン湖畔の両親の質素な別荘で過ごしたが、この年はそこにウィーンからオーストリア人一家がやって来たのである。

「その年の七月の三週間、オーストリア人の夫婦が子どもと一緒に別荘に遊びに来ました。ご主人の名前はヘルムートさんといって三〇歳くらい、奥さんのリジさんは二四歳で、四歳の子どもがいました。ぼくもその別荘にずっといたから、彼らと時間を過ごすことになりましたが、彼らはハンガリー語がひとこともわからない。どうしてもぼくのほうがドイツ語をつかわなくてはならなくなりました。...そしてヘルムートさんとリジさんの提案で、ファースト・ネームでおたがいを呼びあうことになったのです。...また、ドイツ語では、相手のことを呼ぶときの二人称代名詞に” Sie” と” du” の二種類があって、偉い人やよく知らない人には必ず「ジー」と言って、ごく親しい人には「ドウ」というふうに使分けられるのですが、二人の提案でそれも「ドウ」でいこうということになりました。ぼくはまだ一五歳なのに大人に向かって「ドウ」と言ってもいいというのは、とても新鮮なことでした。ぼくの前に知らない世界への窓がパッと開いた気がしました。ドイツ語という武器をもっていれば、自由で楽しい彼らの人生観を学べるというのが、ドイツ語を勉強する大きな原動力となったのです。...三週間たって彼らはオーストリアの首都ウィーンに帰って行きました。...ぼくのドイツ語に対する態度はがらっと変わりました。結局、いまでも人によく勧めている方法のひとつはそ

これから始まったと思うけれども、やっぱりある期間に集中して勉強することです。ぼくのドイツ語の能力は、たぶんその三週間でそれまでの何年間かと同じくらい伸びたのではないのでしょうか。もちろん前提がなければ、つまり基本的な文法や単語がわかっていなければ、三週間では何もできなかったと思いますが、いちおう基礎があつての上での三週間だったので、単語や言い回しをたくさん覚え、聞き取りができるようになって、すごく大きな進歩でした。この三週間は、ハンガリーにいながらにして、結局は留学でホームステイに行ったのと同じだったのです。」
(『ピーター流外国語習得術』、p.7-11)

十五歳のピーターの感動がそのまま伝わってくる文章ではないか。1960年代のハンガリーの少年にとって、ウィーン人との触れ合いはまさしく「異文化体験」だったのである。それ以降、彼はハンガリー語で本を読むのができるかぎりやめ、ドイツ語で書かれた書物（対訳本、小説類のドイツ語訳、数学書など）の読書に専念する。そして、「二年後の一七歳のときには、自分でドイツ語はほぼ完璧にできた」と思うまでになり、「ドイツ人と話をして『あなたはオーストリア人ですか』と聞かれるほどで、母語と同じように話ができるようになった」という。(『ピーター流外国語習得術』、p.12) 語学学習方法という観点からみれば、ピーターのドイツ語学習過程は典型的にヨーロッパ的である。つまり、ヨーロッパ人が近隣のヨーロッパ近代語を学ぶ場合、基礎知識（基本文法とある程度の語彙）さえ獲得すれば、あとはそれに肉付けすればよいのである。要するに、「読む、書く、聞く、話す」に関わる知識や経験を量的に増加させればよいのである。問題はそれをおこなうきっかけ(=学習の動機付け)だけなのである。のちになって大学二年のとき、ピーターはまったく予備知識なしにフランス語の勉強を始めるが、この場合にも、半年ほどの基礎学習ののちは、ほぼドイツ語のときと同じようなやり方をする。せいぜい、ショーロホフの超大作『静かなるドン』のドイツ語訳がフランソワーズ・サガンの長編小説に置き換わったぐらいである。(『ピーター流らくらく学習術』、p.128-133、『ピータ

一流外国語習得術』、p.29-35) ただし、フランス語の習得はピーターを「西欧世界」(=パリ留学)へ導き、さらに、その地での知見は彼にアジアへの目を開かせるのである。そして、1988年、日本に居を構える。

ピーターは「二十代以降、中国語、日本語、韓国・朝鮮語、インドネシア語など、アジアの言語を勉強した」(『ピーター一流外国語習得術』、p.53)とごく一般的に述べるだけで、自らの日本語学習については多くを語らない。だが文字の違い、文法体系の相違、異なった発語の仕方などのせいで、相当の苦労があったことは想像に難くない。数年前、私はNHKテレビで彼が話す日本語を耳にしたことがある。ややゆっくりとした口調ではあるが、訛りも少なく、立派な日本語であった。ピーター・フランクは、ヨーロッパ、アジア双方の諸言語を学んだ数少ないヨーロッパ人の一人である。そして彼は、おそらく日本語を含むアジアの言語の学習の際に、語学学習におけるヨーロッパ的なものを相対化したのではないだろうか。例えば日本ないし日本人への提言として、「[英語の]発音教育については、一種の国家政策としてもやるべきだ」と語るとき、彼は、多くの日本人が欧米の言語を学ぶ際に発音に関して感じる、欧米人には想像もできないような、痛みにも似た感情を、自らの日本語、中国語学習を通じて、ある程度理解しているのではないだろうか。彼から学ぶべきは、学習に関する細々としたテクニク(『ピーター一流外国語習得術』、p.52)ばかりではなく、いま述べたようなセンシビリティでもあるのであろう。彼を外国語学習における「東西の架け橋」とする所以である。

注

- 1 Heinrich Schliemann, "Selbstbiographie bis zu seinem Tode vervollständigt", 1891. 本書の邦訳は何種類かあるが、ここでは佐藤牧夫訳『古代への情熱-発掘王シュリーマン自伝-』、角川文庫、1999年(第二十版)を用い、引用の際には本文中にシュリーマン『自伝』と略記し、ページ数を記す。
- 2 David A. Trail, "Schliemann of Troy: Treasure and Deceit", London 1995 (遠藤芳幸ほか訳『シュリーマン、黄金と偽りのトロイ』、青木書店、1999年)。引用の際には本文中にト

外国語の学習、洋の東西

レイル『シュリーマン』と略記し、ページ数を記す。

- 3 シュルツとキンケルについては、さしあたり、松岡「亡命者キンケルのロンドン生活」(『月刊百科』、1986年8月号、p.15-20)を参照のこと。
- 4 Carl Schurz, “Lebenserinnerungen”, 3 Bde, Berlin 1906-1912. 引用の際には本文中で Schurz, “Lebenserinnerungen” と略記したうえ、巻数とページ数を記す。
- 5 英国王ジョージ三世の閣僚を非難した一連の手紙 (1769-1772年)。筆者の本名は不明であり、フィリップ・フランシス卿 Sir Philip Francis とする説もある。